

2-10 その他サーベイランス

野生動物サーベイランス

野生動物は家畜への疾病の侵入ルートの一つとして指摘されており、家畜の間で清浄化が達成されたと考えられる疾病でも、野生動物の間で疾病が維持されている可能性もあることから、家畜の伝染性疾病の野生動物における浸潤状況を把握する必要があります。このため、農林水産省ではいくつかの野生動物種を対象に、重要な家畜伝染性疾病の浸潤状況を確認しています。

(1) 野生シカのヨーネ病サーベイランス

2016年度から2023年度までに1,794検体(糞便)についてヨーネ病検査を実施したと

ころ、PCR検査により定性陽性(遺伝子が検出されたがDNA濃度が低いもの)と判定されたものが31検体ありました。

また、定量陽性(基準値以上のヨーネ菌DNAが検出されたもの)と判定されたものが8検体、そのうち3検体については糞便培養でも陽性が確認されました(図表2-10-1)。

(2) 野生シカのチュウザン病検査

2017年度から2022年度の間に収集された1,156検体(血清)について、チュウザン病ウイルスの抗体検査を行ったところ、6県(埼玉、奈良県、長崎県、京都府、熊本県、石川県)6検体で抗体陽性となりました。いずれも抗体価は16倍から32倍と低い値でした。

(3) 野生シカの鹿慢性消耗病(CWD)検査

2023年度に収集した80検体(延髄)についてCWD検査を実施したところ、全て陰性となりました。

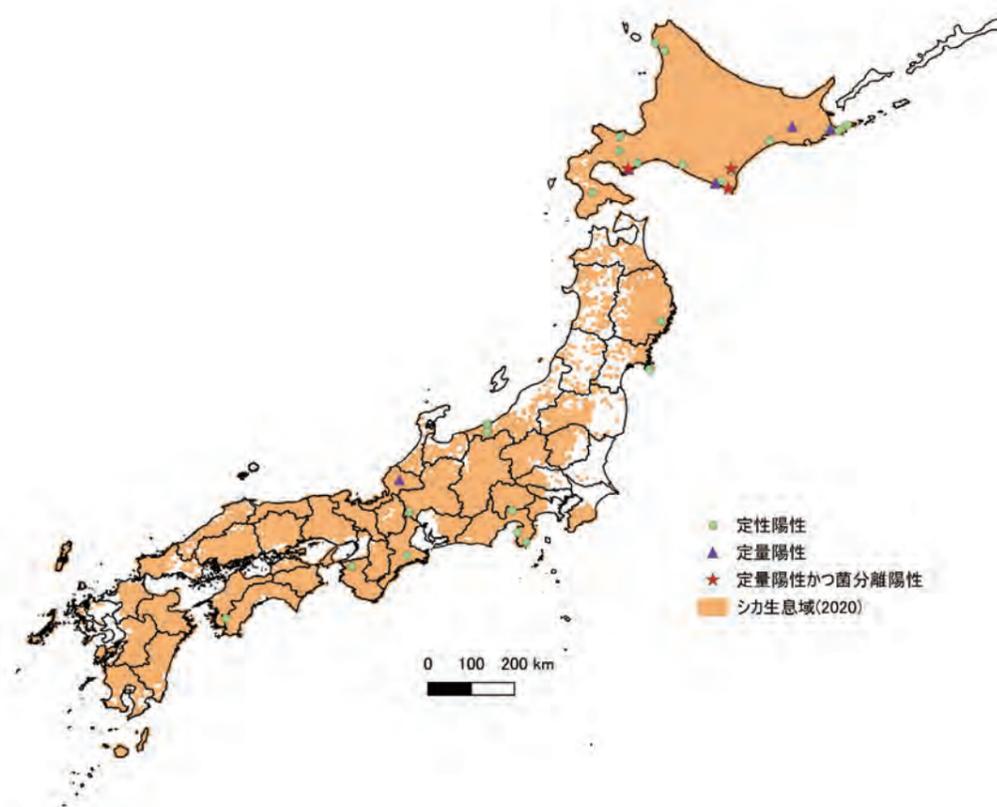
(4) 野生イノシシのオーエスキー病サーベイランス

オーエスキー病は妊娠豚での異常産や哺乳豚での神経症状及び高い死亡率を主徴とする届出伝染病であり、我が国ではオーエ

スキー病防疫対策要領に基づいて清浄化を進めてきた結果、飼養豚では2017年を最後に発生が報告されていません。

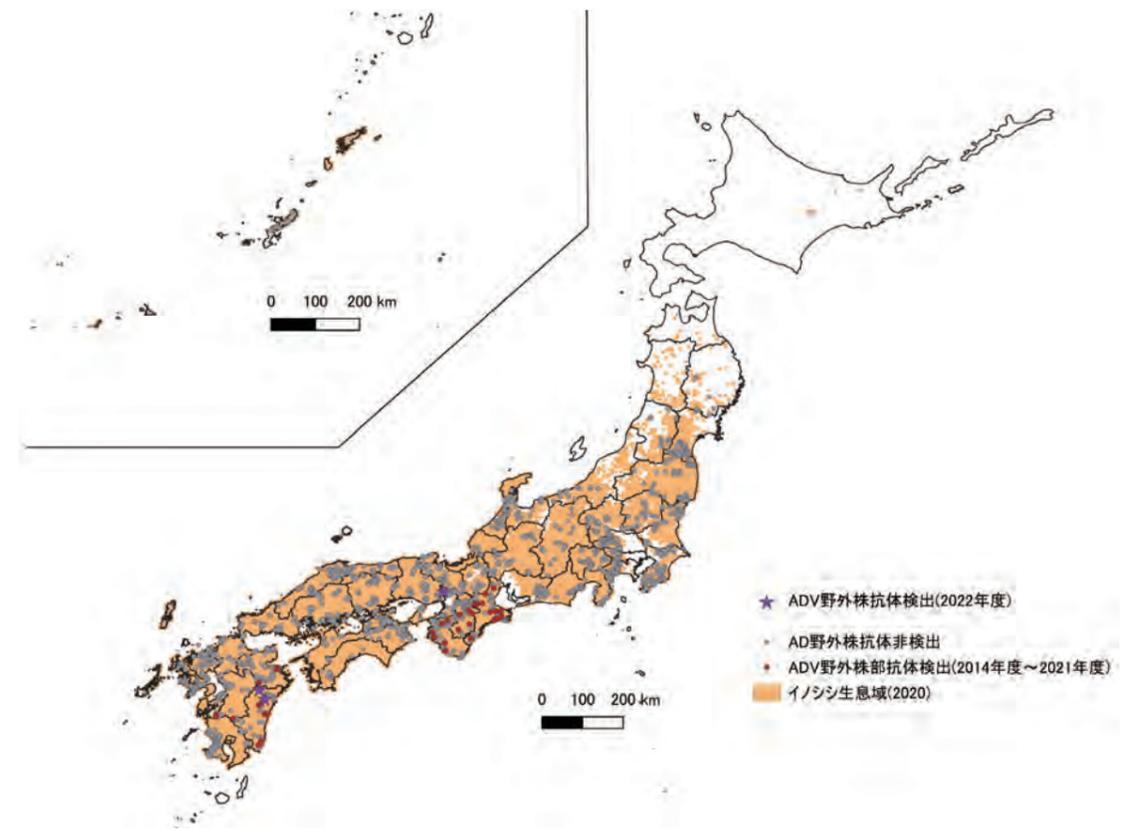
野生イノシシについては、2022年度に、全国36都府県で収集された野生イノシシ検体358検体についてオーエスキー病検査を行なったところ、2県3検体(大阪府1検体、宮崎県2検体)計3検体で抗体陽性が確認されました。2023年度採材分についても調査を継続しているところです(図表2-10-2)。

図表2-10-1 野生シカのヨーネ病サーベイランス(2016~2023年度実施)結果



(注) シカの生息域は環境省のデータ (<https://www.env.go.jp/press/109239.html>) に基づく。

図表2-10-2 野生イノシシのオーエスキー病サーベイランス(2018~2022年度実施)結果



(注) イノシシの生息域は環境省のデータ (<https://www.env.go.jp/press/109239.html>) に基づく。北海道で分布が確認されているが、北海道によると、これらは飼育下由来のイノブタを捕獲したものであり、北海道では自然状態でのイノシシの生息はこれまで確認されていない。

(5) 野生イノシシのトキソプラズマ症検査

トキソプラズマ症は、トキソプラズマ原虫の感染により主に発熱、下痢、呼吸困難等を引き起こす人獣共通感染症で、豚、イノシシ、めん羊、山羊の届出伝染病です。国内では、一部の県のみで豚での発生があります。野生イノシシについては2014年度から検査を行っており、2023年度は32都府県で収集された320検体についてトキソプラズマ原虫抗体検査を行ったところ、22検体が陽性となり、17県において少なくとも1頭

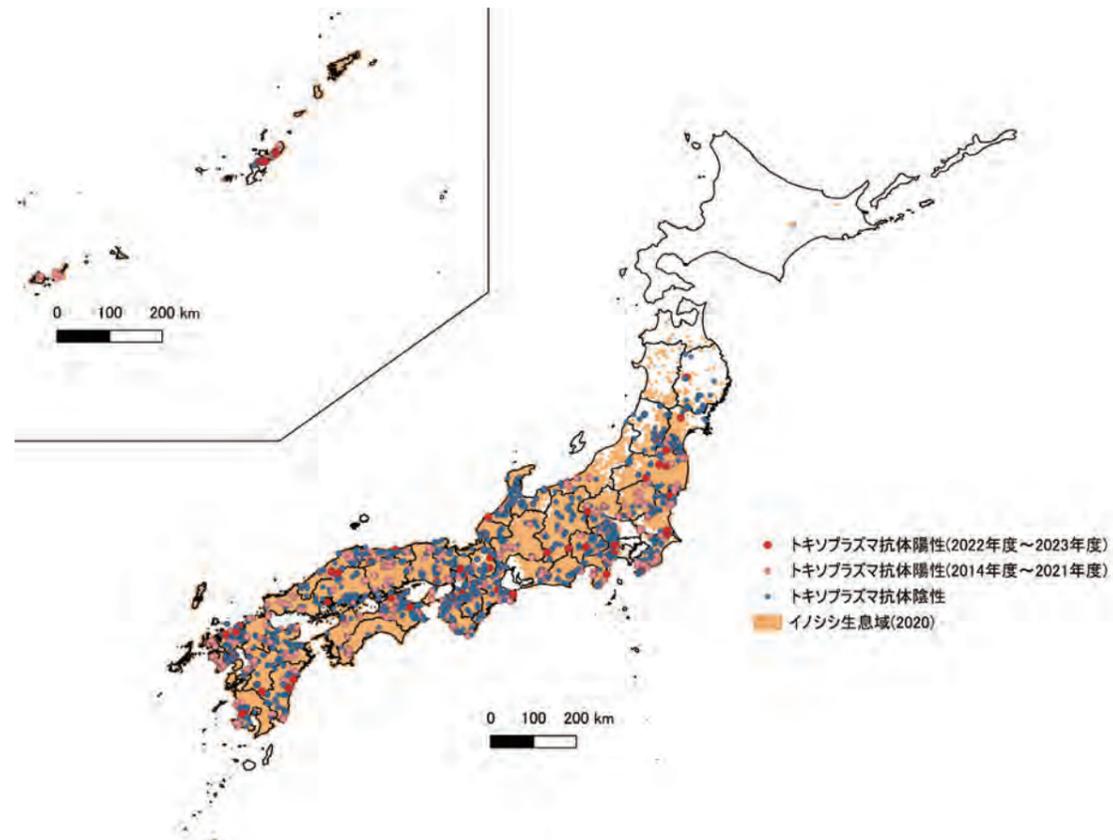
の抗体陽性が確認されました（図表2-10-3）。

野生動物サーベイランスについての詳細は以下に掲載されています。

https://www.maff.go.jp/j/syouan/douei/katiku_yobo/wildlife_surveillance.html



図表2-10-3 2023年度野生イノシシのトキソプラズマ症サーベイランス結果



(注) イノシシの生息域は環境省のデータ (<https://www.env.go.jp/press/109239.html>) に基づく。北海道で分布が確認されているが、北海道によると、これらは飼育下由来のイノブタを捕獲したものであり、北海道では自然状態でのイノシシの生息はこれまで確認されていない。

参考資料